

公益社団法人隊友会

# 館山支部だより

平成28年11月号 (通巻77号)

### 支部の連絡窓口

千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表) 川村 巖  
〒294-0032館山市笠名1357  
電話0470(22)0230  
メール g\_marine@f5.dion.ne.jp

## ブレまくったエトウルデ大統領&まさかのトランプ氏!

エトウルデ大統領が、南沙諸島問題で中国と激しく対立していたかと思いきや中国に急接近して膨大なインフラ援助を獲得し、オバマ米大統領を痛烈に非難して米国との決別を宣言、2年以内に在比米軍の撤退を強調する一方で、米国抜きの軍事・経済は考えられないとか・・・その豹変ぶりというかブレ方が激しすぎるのでは? 一体この人の真意・本心がどこにあるのかますます分からなくなってくるのです。  
片や、過激発言でさんざん物議をかもしたトランプ候補の「まさか」が、世界中の“不安”を尻目に現実のものになってしまいました。選挙運動中と当選後の発言の食い違いなど、不透明な部分が多過ぎると思うのです。  
世界中の不安が現実のものにならないよう、じっくりと軍事、政治、経済を勉強の上、大国の大統領に相応しい威厳をもって責務を果たしてもらいたいものですね(凡人のぼやき)。 <川村 記>

### 支部活動の概要 (実績&予定)

#### <10・11月の活動実績>

- 10. 8(日) 千葉県護国神社秋季例大祭奉仕作業(千葉)
- 10.10(月) 旧海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
- 11.17(木) 館山航空基地殉職隊員追悼式
- 11.26(土) 11月支部役員会(コミセン)

#### <12・1月の活動予定>

- 12. 2(金) 横芝光町自衛隊協力会研修支援(館山基地)
- 1月上旬 第21航空群司令年始表敬(OB4団体代表)
- 1.22(日) 歴史研究会(原宿 水交会)
- 1.28(土) 1月支部役員会(コミセン)

### 殉職隊員を追悼する

11.17(木)館山航空基地

恒例の館山航空基地殉職隊員追悼式が隊員が整列する中、遺族関係者、自衛隊協力会ほかOB団体、各種団体の代表80余名が参列して「悠久の碑」の前で肅々と執り行われました。  
毎年、自衛隊記念日には市ヶ谷・防衛省構内のメモリアルゾーンで、陸海空自衛隊殉職隊員の合同追悼式が行われ、今年も10月22日に内閣総理大臣はじめ各界の来賓等370余名が参列のもと、警察予備隊創設以降殉職された1、909柱の御霊の追悼が行われております。  
また、千葉県では陸自下志津駐屯地「鎮の庭」で、10月30日に千葉県出身陸海空殉職者49柱(館山は1柱)の御霊の慰霊が行われ、県知事、防衛大臣政務官ほか在葉部隊指揮官、自衛隊協力団体等の代表130余名(県隊友会から26名)が参列しております。 <支部長>



<「悠久の碑」にて  
殉職隊員の御霊に献花する参列者>

追悼会食の場で群司令から、NHK大河ドラマ「真田丸」で豊臣側の武将後藤又兵衛役を演じるタレントの「哀川 翔」こそ、42年1月徳島沖で殉職された故福地2海佐のご子息(長男、当時5歳) である旨紹介がありました。当時(着任早々ながらも)、101空に勤務した一人として感無量のものがありました。 <川村 記>

### (紹介)「海軍の歴史勉強会」を聴講して

11.13 水交会主催

- テーマ 「満州・上海事変における日本と中国」(講師 影山好一郎氏、講義3時間半)  
講師は、防衛大9期(昭和40年卒)の元海上自衛官で、航空装備(電子整備)出身、学究・研究肌で帝京大学及び防衛大学校教授を歴任。
- 講義の根拠文献・資料となったのは、戦前、海軍軍令部が編纂した「昭和六・七年事変海軍戦史」で、この原本は終戦時、米軍に没収され、現在も日本には存在しない希少なもの。
- ◎この原本を基に、講師と田中宏己氏(早大大学院博士課程卒)共同により、中正・公正な視点で満州・上海事変に至る中国大陸の情勢、日中をめぐる軋轢等について調査研究し、その集大成として著述(下記)したもの。  
「昭和六・七年事変海軍戦史 全四巻」(2001.7 緑蔭書房 影山好一郎・田中宏己 共著)  
満州事変・上海事変の史実の詳細を究明・記述した「軍機・海軍正史」といべき、多くの研究者未見の史料として、初めて一般に公表された「公刊戦史」といべきもの。

<所見>戦後の偏った・誤れる歴史認識の要(かなめ)は、日中をめぐる軋轢・紛争(日中戦争等)の史実・真相が究められ・伝えられていないことであると確信しております。今回の講義は「中正・公正な歴史認識」のためにも参考とすべき屈指の研究成果として、この場で紹介するものです。 <川村 記>

### 会員の異動

10/1 伊勢春夫会員(海) 転居に伴い茂原支部へ転籍

### 寄稿

## 41年間の海自勤務を終えて

昭和50年4月に入隊、平成27年3月に定年を迎え、1年間の継続任用を経て今年3月末に退職しました。終ってみれば、あっという間に過ぎ去った41年間の自衛隊勤務で、総務班を皮切りに管理隊、経理隊、補給隊、厚生隊など事務官配置のある部署はすべて経験しました。総務班で司令部派遣勤務のとき群司令にかかっていた電話をあわてて切ってしまったのははじめ、オオボケや失敗、冷や汗ものの連続でしたが、周りの先輩方のアドバイスや同僚、後輩の皆さんに助けられ何とか切り抜けてきました。無事、大過なく勤務を全うできたのも皆さんのお陰と改めて感謝しています。  
一番思い出に残っている配置は、経理隊で給与計算をしていた時です。年末調整、再年調、年度末処理と続き、市役所や税務署に向かい照合・調整など、隊員の皆さんの生活がかかっている事務処理だけに、忙しさに加えて大変細かい神経を遣う仕事でしたが、それだけにやりがいのある結構面白い?配置でした。  
総務の人事係では、退職する隊員への隊友会の案内・入会手続を担当していましたが、その関係で自分が退職するときは当然入会と考えていました。同じ時期に定年を迎えた主人に隊友会のことを話すと「まだ入会していない」ということでしたので、この4月に夫婦で入会することになりました。今後ともお引き立てのほどよろしく願います。

### 駆け足・走ることに魅せられて・・

昭和56年、館山補給隊勤務の頃、隊長がテニス好きのときは昼休みはテニスに夢中になり、駆け足が趣味の班長が上司のときは「おい走るぞ」の毎日でした。テニスは運動神経ゼロのため、まったくものにならずあきらめましたが、駆け足のほうはあまり運動神経が必要ないせいかな長続きしました。これが私にとって絶好のストレス解消になりました。仕事や人間関係などでストレスが溜まり疲れた時は、課外に5キロほど走れば疲れが丁度よい具合にとれました。それでも取りきれずに溜まった1年分のストレスは、1月の若潮マラソンを完走することで心身ともにクリアされ、走ることが私の身体、生活の一部になってしまいました。  
若いころは、フルマラソンを3時間台で楽に完走していましたが、40代は4時間台、50代になると5時間台、そして還暦を迎えて制限時間ぎりぎりという具合に確実にペースダウンしております。最近のレースでは、途中で挫折することがないよう体調に応じて10キロにエントリーすることが多く走る距離が短くなっていますが、米寿まで若潮マラソン参加を目指して、無理なく、楽しく頑張り続けたいと思っています。 <北岡 順子会員(海事)>



### 随想

## 72年前 館山から飛び立った零戦隊「サイパン島特別攻撃隊」

昭和19年11月26日、館山基地を離陸した12機の零戦隊が硫黄島経由で翌27日朝、サイパン島向け出撃した。アスリート基地のB-29の銃撃破壊を目的としたが全機未帰還、全員壮絶な最後を遂げ後に「第一御盾特別攻撃隊」と命名され戦功が讃えられた。米軍側の資料を含め記録がないため、出撃の経緯や戦果は定かではない。  
昭和19年7月のサイパン島(マリアナ群島)の陥落により、本土に対する空襲(戦略爆撃)の脅威が現実味を増し、サイパン基地に対する陸海軍の決死的な夜間爆撃が多量の犠牲を払って繰り返されたが、成果は得られなかった。このような状況下、東日本の防衛を任務とする三航艦(第3航空艦隊司令部・木更津)は、B-29による本土爆撃を阻止するための乾坤一擲、捨て身の戦法とも言える、少数の戦闘機隊による決死的な昼間銃撃作戦を立案、実行に移したというのが大方の見方である。硫黄島出撃時、途中で行動を共にした彩雲偵察飛行隊搭乗員の証言(回想記)等を手がかりに、出撃に至るまでの状況を推測してみた。



<日本軍が撮影したサイパン・アスリート基地>  
拡大写真ではB-29の配備や基地の状況が克明に判別できる。(防衛研究所戦史部保管資料)

### 決死的な航空偵察による情報収集

写真は、サイパン島アスリート基地を高高度から撮影したもので、三航艦所属の偵察飛行隊の偵察記録によれば、19年後半、偵察機「彩雲」による偵察飛行が頻繁に行われている。B-29の配備状況から写真は10月頃のものだと推測され、銃撃作戦を練る上での希少な情報として最大限活用されたことであろう。

### 特別攻撃隊・隊員の選抜と集中訓練

三航艦所属の航空隊で戦闘飛行隊(戦闘機)が配備されていたのは、茂原に司令部を置く252空だけで、その一部が館山に駐留し基地の防空を担っていた。特設飛行隊に指定された252空には優先的に戦闘機と搭乗員が補充されたが、各地の戦闘で多くの搭乗員を失い、連戦練磨のメンバーを選抜することは到底不可能であった。それを補うため地上の目標に対する集中的な機銃掃射訓練が行われたことであろう。平砂浦航空演習場での零戦の機銃掃射訓練が激しさを増し、鷹の島射撃場では連日、機銃の照準調整が繰り返されたであろうことは想像に難くない。

### 攻撃隊員たちの胸中は・・・

当時、比島方面の海上作戦ではすでに「航空特攻」が始められていたが、三航艦は特攻出撃を行わず、サイパン島銃撃作戦では、零戦隊は作戦後、100キロ離れた海軍警備隊守備下の小島に着陸し、乗員は潜水艦に収容して本国に帰還させる段取りであった。戦闘場面で激しい対空放火に見舞われたのか、自ら航空機もろとも突入したのかは知る由もない。彼らの胸中にあったのは、「国のため」と同時に「肉親・兄弟、家族、同胞のため」という悲壮な決意・思いであろう。 <自称地域史探索マニア(海)その11>